観光論へのコミュニティ・アプローチ
——新しい観光論研究の動向に関連して——

田　原　榮　一

I　はじめに
II　新しい観光論研究の動向
III　観光者と地域住民の観光インパクト
IV　イベント観光とオーセンティシティ
V　結び

I　はじめに

観光は，国際観光と国内観光の双方とも，さまざまな社会的・経済的・文化的背景を持った人々の交流と，目的地の経済に対してインパクトを与える観光消費の再分配をもたらす。

観光インパクトに関する初期の研究は，主として経済的側面に焦点を合わせて受入れ地に対する経済的便益を中心に楽観主義の傾向が認められた。しかし，環境の重要性への認識の高まりや，マス・ツーリズムへの反作用のひとつと見做されるグリーン・ツーリズム，エコロジカル・ツーリズムの登場など，1960年代から重要なテーマとなった環境の持続可能性（sustainability）あるいは持続可能な開発（sustainable development）を望ましい目標とした保護と開発の相互依存・両立性に基づく持続可能な観光（sustainable tourism）または持続可能な観光開発（sustainable tourism

development）が新しい観光動向として注目されるようになった[1)]。

持続可能な観光の鍵は，観光活動あるいは観光開発が長期的にみて環境の適正収容力を超えないことにあり，地域社会レベルの観光を基盤とした観光，開発，環境の3者の複雑な関係に対する政府，企業などの対応が重要な課題となっている。近年，第三世界の環境に対する観光インパクトに関する関心が広まってきており，観光と環境に関する政策の地域・地方レベルの協調を通じた地元参加による観光の推進は，その否定的・消極的なインパクトへの対応として，今後益々重要になってくるであろう。例えば，ECの文化観光憲章（Charter for Cultural Tourism）は，観光によって短期的な利得を得ることから，環境破壊を避けつつ長期的な経済的・文化的・自然環境的便益を実現すべきであるといった考え方に立脚して，持続可能な観光プログラムを提供することを目指している。

観光インパクトは，観光者の数とプロフィールの特性（観光目的，滞在日数，旅行形態，観光行動，移動手段，旅行準備など）や，資源の特徴（資源特性と規模，開発の段階，政治・経済・社会・環境・文化構造，地理的分布など）ならびに観光開発に対する期待や強度などによって基本的に影響されるが，コミュニティ・レベルにおける環境や文化などに対する関心の高まりによって，持続可能な観光または責任ある観光（responsible tourism）が注目されるようになり，観光における環境の適正収容力や責任ある消費の概念と密接に関係して，その政治的・社会的状態を背景に，観光開発の水準内容と地域住民へのインパクトとの経済的便益と環境的・社会的費用の評価に基づく感覚的バランスの確立が観光論研究にとって大きな課題となっている。

このためには，観光インパクトのコミュニティ・レベルにおける社会的表象（social representation）の明確化や情報提供，ならびに文化遺産に対

するオーセンティシティ（authenticity）などが重要な検討課題として提起される。

持続可能な観光開発においては，観光開発管理計画における観光開発の空間的分散と地元参加に基づく環境インパクト研究，環境の収容力の決定，環境モニタリング研究とともに，観光者の行動管理や資金援助，ならびに適正価格の設定と地域住民の支持や参加などが不可欠である。

本稿は，かかる基本認識に基づいて観光論へのコミュニティ・アプローチに基づき持続可能な観光の観点から観光インパクト分析を中心に考察し，新しい観光研究の一端の理解に資することを目的としている。

（注）

1）Witt と Moutinho は「持続可能な観光とは，長期的な環境の損傷をもたらさない観光の水準およびタイプ」としている。

Witt, S.F. and Moutinho, L. (1994) Tourism Marketing and Management Handbook, 2nd, ed., Prentice Hall, p.133.

また，Cooper, Fletcher, Gilbert ならびに Wanhill は，持続可能な観光開発の概念は，観光消費が受入れ地の収容力を超過しないことを確実にする長期的な計画を求めるとし，適正収容力，すなわち，受入れ地を悪化せずに受容できる利用の大きさが問題となる，と述べている。

Cooper, C., Fletcher, J., D. Gilbert and Wanhill, S. (1993) Tourism: Principles and Practice, London: Pitman Publishing, pp.77-78.

II　新しい観光論研究の動向

近年，人間行動の変化と開発圧力への対応に関する概念的シェーマの基礎として生態学的に持続可能な開発（ecologically sustainable development，以下，ESD と略稱）[2)]が注目されている。その骨子は経済成長と変化

に対する管理手法の観光開発への適用であって，オーストラリア，カナダ，イギリスでは，既に国家の目標，政策や，さらに詳細な諸原則に織り込まれ，その他の国でも計画立案や政策文書において普及するようになった。

このESDの目標と特徴は，オーストラリア政府の観光に関するワーキング・グループの報告書などでは，特に社会的公正とコミュニティの参加，地域計画策定の性格，ならびに訪問者の体験の質に関心が払われているが，その主な内容は，つぎのごとく整理することができる[3)]。

1．目標

(1)　コミュニティの物質的・非物質的な福利を改善する。

(2)　世代間ならびに世代内の公平性を保持する。

(3)　生物学上の多様性を保護し，かつ生態システムを維持する。

(4)　コミュニティの文化の本来の姿と社会的な結合を保証する。

2．特徴

(1)　観光はさまざまな経験の質に関係している。

(2)　観光にとって社会的公正とコミュニティの参加が必要である。

(3)　観光は資源の限度内で運営されるべきである（インパクトとエネルギー使用の最小化ならびに効率的な廃棄物管理とリサイクル技術の利用が含まれる）。

(4)　観光は世代内ないし世代間の全範囲にわたってレクリエーション，教育ならびに文化的機会を保持しなければならない。

(5)　観光はゲストが訪問した地域について理解を得るとともに，関心を促進させ，ホスト・コミュニティの環境保全に資するべきである。

(6)　観光は他の産業や活動に対して持続可能な妥協を図らなければならない。

(7)　観光は地域，地方，国家計画に統合される。

グローバルな観点からみたESDの重要な特徴は，観光問題に関しコミュニティの福利が優先的に考慮されており，また，生物学上および生物物理学上の配慮も社会的なコミュニティ・インパクトの限界に関連して重要視されていることである。したがって，社会的表象アプローチにおいては，観光に対するコミュニティの反応への理解はESDにおける中心事項であるといえよう。

つぎに，グローバルな観光とコミュニティ変化に関し，世界観光機関（WTO）や世界旅行・観光会議（World Travel and Tourism Council）などの観光政策に関する報告書では，観光政策の具体化について，つぎの19項目を主要な論点としてあげている[4)]。

(1) 目的地の物理的・社会的収容力の双方に関し観光開発には一定の限界があることを認識すること。

(2) 自然環境は観光開発と管理において中枢的な役割りを演じること。

(3) 観光インフラストラクチャーの整備に要する高額の資本費用や，その維持のために要する税金／料金の負担の増大，さらに，観光産業への財政的圧力の増大について考慮すること。

(4) 技術進歩は生産性の向上，人的資源の開発，リストラなどへの機会と圧力を増大させる。

(5) 観光は社会的に責任のある産業として開発を行い，発生するさまざまな圧力に対して，単に対応するよりも，むしろ臨機応変に行動しなければならない。

(6) 地域衝突やテロリストの行動は，観光開発とその繁栄にとって障害になる。

(7) 市場駆動経済への政治的シフトは，イデオロギー支配の意思決定や開発政策よりも，寧ろ市場力がグローバルな再構築をもたらす。

(8)　地域住民対応型観光は明日に向っての注意格言である。すなわち，観光問題の背景への積極的な関与とコミュニティの要求に対する対応は，観光開発と管理において優先される。

(9)　最近の観光産業の発展にも拘らず，政府の認識や地域の社会的・経済的な開発と福祉に対する重要性に関しては満足すべき評価はなされていない。その理由のひとつは，観光関連データの信頼性の欠如である。

(10)　人口統計学上の変化は，観光のレベルと性質に対して大いに影響する。

(11)　観光のパターンは増加する多様なライフスタイルによって変化する。

(12)　人的資源問題は引続いて重要性を増している。

(13)　文化的な多様性はグローバルな社会的関連をもって認識されなければならない。

(14)　市場経済への傾向と政府財政の収縮は，観光施設・サービスの民営化と規制緩和への強い圧力になっている。

(15)　健康と安全問題は旅行に対し重要な歯止めとなる。

(16)　地域の政治的・経済的な統合と協力は優勢になるであろう。

(17)　グローバル／超国家的な企業の影響は加速度的に増大するであろう。

(18)　南北（先進国／発展途上国）諸国間のギャップの広がりは，さまざまな摩擦を生じさせ，調和のとれた観光開発にとって恒常的な問題の根源となるであろう。

(19)　現行の管理システムとプロセスに対する不満の増大は，観光の新しいフレームワーク（パラダイム）へ先導するかも知れない。

上記の各事項のうち，本稿に特に関係が深いのは(1)，(5)，(8)，(18)であって，コミュニティに基礎をおいた観光問題の将来にとって，これらは調査研究や開発・管理に関し益々重要になるであろう。Richie[5]は，これらを総称して地域住民対応型観光（resident-responsive tourism）と名づけ，その中期ないし長期の枠組を戦略的リサーチ，評価リサーチ，マネジメント・リサーチ，行動リサーチおよびオペレーショナル・リサーチに分類した。

この地域住民対応型観光を促進・容易にするためのリサーチ・ニーズに関し，Richie はつぎの調査項目をあげている[6]。

(1) 観光開発の優先度と方向に関する決定における公衆参加／インプットを改善するための方法論を確認すること。

(2) 観光施設／サービスに対する地域住民以外の者の所有の役割，インパクトおよび受容性が承認されること。

(3) 観光開発に関する地方ビジョンを公式化すること。

(4) 観光計画立案と開発への地域住民の参加を高めるプログラムのインパクトを評価すること。

(5) 観光に対する地域住民の支援に関し，外国人所有によるインパクトについて決定すること。

(6) 観光インパクトと諸問題に関するコミュニティへの情報提供の費用・効果プログラムを企画設計すること。

(7) 地域住民の訪問者に対する歓迎を高めるプログラムを評価すること。

(8) 地域住民と訪問者の双方に対して便益をもたらす情報提供の場所を決定すること。

観光に対するコミュニティの反発に関しては，まず，観光の重要な舞台として環境を認識し，観光開発がもたらすさまざまな価値の確認に関する

研究，観光開発の受入れについてコンセンサスが得られるような実行可能性のある計画立案手法の評価ならびに文化的・社会的汚染の測定と管理などが課題となる。つぎに，南北ギャップに基づく摩擦に関しては，その根源の確認や，提供できる適当な旅行経験の確認，観光への参入／退出を容易にする最善の方法の決定，代替的アプローチの有効性に関する評価などが行われる必要がある。

Hawkins[7]と Richie[8]は，地域住民対応型観光は，将来の観光政策や観光計画立案にとって益々重要になってくると強調しているが，かかる見解は，既に Murphy[9]と Krippendorf[10]によって観光計画立案に関する新しいアプローチとして述べられており，とりわけホスト・コミュニティの環境に対するネガティブなインパクトに関連して，Krippendorf は社会現象としての観光におけるさまざまな変化について論述し，また，Murphy は新しいコミュニティ推進観光計画立案アプローチ（a new "community-driven-tourism planning" approach）として説明しているが，その骨子は，ローカル・イメージに対するよりよい理解に基づくホスト・コミュニティの認識，選択ないし優先に関する評価は，観光産業の長期的な生き残りにとって重要な問題であることが指摘されている。

これらの新しい観光（new tourism）の特徴は，観光に関するコミュニティの社会的表象と密接に関係しており，その基底として，(1)観光開発の水準，(2)観光に対する経済的依存度，(3)居住地から観光エリアまでの距離，(4)観光者との接触レベル，(5)反応する人口統計学的要因，(6)コミュニティの属性，(7)アウトドア・レクリエーション施設の利用，(8)コミュニティの一般的経済状態，(9)観光に関する意思決定に影響を与える知覚能力，(10)観光に関する知識，(11)政治的な自己アイデンティティ，(12)観光に関する PR キャンペーンの影響などがあげられる。この場合，特に観光が及ぼすコミュ

ニティのホスト文化への影響，社会的インパクトやインフラストラクチャーの変化，環境監査，社会経済的コストの管理などに関してコミュニティ・ベースによる創造管理的アプローチに基づく解決策への取組みが必要である。

（注）

2）Philip L. Pearce, Gianna Moscardo and Glenn F. Ross, Tourism Community Relationships, Pergamon, 1996, p.6.
3）Philip L. Pearce, Gianna Moscardo and Glenn F. Ross, ibid., p.7.
4）Philip L. Pearce, Gianna Moscardo and Glenn F. Ross, ibid., p.9-10.
5）Ritchie, J.R.B. (1993) Tourism Research: Policy and Managerial Priorities for the 1990s and Beyond. In Tourism Research. Critiques and Challenges, D. G. Pearce and R.W. Butler (eds.), London: Routledge, pp.201-216.
6）Ritchie, J.R.B., ibid.
7）Hawkins, D.E. (1993) Global Assessment of Tourism Policy. In Tourism Research. Critiques and Challenges, D.G. Pearce and R.W. Butler (eds.), London: Routledge, pp.175-200.
8）Ritchie, J.R.B., ibid.
9）Murphy, P.E. (1981) Community Attitudes to Tourism: A Comparative Analysis. Tourism Management 2, pp.189-195.
10) Krippendorf, J. (1987) The Holiday Makers: Understanding the Impact of Leisure and Travel. London: William Heinemann.

III　観光者と地域住民の観光インパクト

観光者と地域住民の観光インパクトは，倫理的観点や国際的事実などからもマイナスのインパクトが無視される場合には重大な影響を与えることがある。例えば，(1)観光事業を促進する機関または会議などへの支援の低下，(2)不本意な観光産業への従事，(3)口コミによる観光商品・サービスの

販売・PRなどに対する熱意の欠如，(4)法外な料金の要求，無礼，観光者の行動に対する無関心さや観光者への敵意，(5)コミュニティの反対による観光開発の遅延，(6)観光者の入り込み制限などがあり，コミュニティと観光事業との経済的，社会的，文化的ならびに政治的な相互結合作用への理解は観光論研究にとって極めて重要な領域といえよう[11]。

観光者と地域住民との異文化接触は，移民，学生，外国人労働者などと異なって，観光者は現地のコミュニティに順応する必要はなく，大抵の場合，現地の法的・文化的制約を免除されており，自己の国家の小さな文化の泡の中に入って，その土地を横断することができる[12]。また，来訪したコミュニティを観察・調査できる部外者として位置づけられ，その接触の効果は，観光者の豊かさ，動機，一時性，ホスト・コミュニティにおける社会学的立場などによって仲介される。

さらに，ホスト・コミュニティの規模と技術的発展に基づく観光インパクトの態様は，Pearce[13]によれば，つぎの4つに類別される。

1．隔離された貧しいコミュニティにとっての直接的な接触の影響

観光者と第三世界の現地の人々および貧しいコミュニティとの間の直接的な接触は，しばしば不和，搾取など社会問題を生じさせ，観光者が現地の人々を観察する単純なプロセスでも深刻な影響を与えることがある。例えば，民族集団の特定の文化的・経済的な日常行動が観光者の興味をひく観光アトラクションとして売り込まれる場合には，その影響は大きい。その例として，Smith[14]はアラスカで漁民と猟師がしとめた獲物の解体と観光者の海岸散策の例を論証し，また，トンガにおける研究からUrbanowicz[15]は，巨大なクルーズ船からの観光者が小さな町を混雑させ，時として主要な観光アトラクションでトンガ人の子供たちが来訪者に物乞いをするようになった，と述べている。

したがって，小規模で技術発展が進んでいないコミュニティにとって，来訪者数の制限とある一定の行動基準の要求は，観光者とホストとの直接的な接触の結果に影響する重要な要因であるといえよう。

2．隔離された貧しいコミュニティにとっての間接的な接触の効果

観光が第三世界や技術発展が進んでいないコミュニティに対して社会的便益をもたらす見解を援護する最大の理由として，それが民族の芸術と伝統を生き返らせることが指摘される。しかし，現地の文化は，その儀式と芸術作品に象徴的・精神的重要性を結びつけることが多く，その意義を十分に理解するためには，観光者の側にかなりの人類学的知識が要求される場合がある。また，観光への経済的依存度の増大は，雇用構造とコミュニティの役割を変え，男性よりも女性に対して新しい仕事を生み出すケースが多い[16]。さらに，これらの多くは熟練を要せず，低賃金で，現地の人々の欲求不満と疎外感を促進することがある[17]。

これらのマイナス影響の統合的な効果は，観光者とホストとの摩擦の経験指数の仮定に対する研究者の関心を生じさせた。例えば，Hills と Lundgren[18]は刺激指数を提案し，そは観光者とホストとの摩擦の多くの形態の合成物であるとした。

3．技術発展が進んでいるコミュニティに対する直接的な接触の影響

全ハワイ州観光インパクト基本調査（The Hawaiian Statewide Tourism Impact Core Survey, 1989）の報告書[19]「日常生活と訪問者に対する態度」においては，訪問者の態度に関するコミュニティのヒエラルキーの存在の示唆に基づき，その肯定的な態度と否定的な態度の混合－統合が試みられた。すなわち，コミュニティのニーズによって異なった地域的見解があり，ハワイでは，観光の重要な経済的役割

といった基本的なニーズが満たされると，興味は他のニーズ，あるいはそれまであまり重要でないと見られていた観光のマイナスの副作用に向かう，と指摘している。このほかRoss[20]によるオーストラリアにおける小規模・高密度の観光環境の研究，Pi-Sunyer[21]の国際訪問者に対する現地のステレオタイプの現われ方や，ホストと地域住民の出会いの質への影響に関する調査があげられる。

これらの調査における重要な課題のひとつは，ホストとゲストの間の直接的な接触の社会的・文化的成果を促進する要因の確認であって，Furnham と Bochner[22]は，両者が接触する前に双方の社会的・文化的習慣について教育することは，両者の出会いにおける肯定的な態度を生み出す方法のひとつである，と述べている。

4．技術発展が進んでいるコミュニティに対する間接的な接触の効果

観光収入による大邸宅の整備，国立公園・野生動物保護区の存続などに対する支援は，先進社会における観光者の間接的な影響である。この場合，観光支援のために現地コミュニティが負担する費用，例えば，消防隊，保健施設，道路，上下水道などに対する使用の増加などが注目される。この分野における代表的な研究として，Allen，Long，Perdue，Kieselbach[23]は，コロラド州の20の農村地方のコミュニティ調査に基づいて，コミュニティの生活の質に関する見解は，その規模と明らかに関係し，また，その幾つかの側面が観光開発による変化に敏感であることを発見した。すなわち，観光は環境問題，消防・警察・道路など公共サービス，コミュニティの接触の総量と組織内の参加など社会的機会には影響を与えたが，レクリエーション，教育，医療機関に対しては殆んどインパクトは与えなかった。また，コミュニティの観光関連費用負担に対する課税体系の確立は開発計画に関連して必

要性が大きいことが指摘された[24]。

これらを要約すれば，ホスト・コミュニティが小規模で，技術発展が進んでおらず，隔離されている場合には，観光者はホストに対して最大級の社会的・心理的インパクトを与えるが，受入れ地域社会が技術的に比較的発展しており，観光者とホストの間の豊かさのギャップが比較的に小さい場合には，接触の経験は小さなインパクトとなる。しかし，双方とも環境とインフラストラクチャーの費用負担などを通じてホストへの間接的なマイナスのインパクトが生じやすい。一般に観光は，幾つかの社会的・環境的インパクトを伴う経済成長源として評価されているが，居住者に受入れられるためには，そのインパクトの認識とともに，他の産業との比較研究が重要である。

つぎに，観光者による異文化接触の効果，換言すれば，観光者自身の旅行経験に関する初期の研究はSmith[25]によって行われた。彼はヨーロッパを旅行して夏を過ごした若いアメリカ人に対して，旅行の前後に郵便によるアンケート調査を行い，根本的な態度は旅行経験に影響されないと結論づけ，態度を変化させた少数の旅行者に対する面接調査によって，生じた変化は個人のある機能的人格欲求よりも仲間同調圧力のためである，と論じている。

観光者の態度変化の社会心理学的研究に関しては段階モデルが一般的である。例えば，Smithは観光者タイプによる接触の度合いから観光開発を理解し，コミュニティへのインパクトの拡大の順に表1のごとく7種類に分けて説明した。

異文化接触が現地コミュニティに与える社会的インパクトに関する研究は，スミスの研究とほぼ同時期にDoxey[26]によって行われた。彼は，ホストとゲストの相互作用および関係を評価する刺激指数を提案した。Doxey

表1　Smithによる観光者の分類

観光者のタイプ	観光者の数	コミュニティ・インパクト
1. 探険家	非常に限られている	
2. 旅行通	殆んど見られない	
3. 物好きタイプの旅行者	まれだが見られる	着実に増加
4. ゆとりのある旅行者	時々見られる	
5. 初期の大衆観光者	一定の流動	
6. 一般団体観光者	継続的な流動	↓
7. 次々に送り込まれる大量の観光者	継続的に大量に到着	

(Source) Smith, V.L. (ed.) (1978) Hosts and Guests, Blackwell, Oxford.

の尺度は多幸性（接触の喜び），無感動（より人数が増加することへの無関心），苛立ち（過度の物価上昇，犯罪，不作法，文化的規則の破壊への懸念と困惑），そして最後に敵意（訪問者への隠された明らさまな反感）の4段階に分けられる。

さらに，Butler[27]の段階開発モデルにおいては，観光のインパクトは関心の直接的な中心でなく，観光地を導入，発展，成熟，停滞，そして衰退あるいは再生のいずれかの段階に分け，観光地評価に関しては，衰退段階，すなわち，付随する環境的・社会的・経済的問題が多くの変数の収容レベルに到達するか，あるいはそれを上回るような最高人数に到達する段階において社会的インパクトが出現する，と述べている。

これらの個人的・社会的段階に基づくモデルでは，諸段階の間の境界の不明瞭性や段階移動の継続性など不明確さに対し多くの批判がなされたが，これらの難問は未だ解決されていない。その後，1980年代に行われた研究は，Brougham と Butler[28]，Liu と Var[29]，Liu，Sheldon と Var[30]，Long，Perdue と Allen[31]，Milam と Pizam[32]，Murphy[33]，Sheldon と Var[34]などに見られるように，回答者の人口統計学的特性と関連づけた社会的インパクト要因の分析や，観光インパクトに対する地域住民の反応な

どが詳細に記述され，これらの研究を通じて，年配の地域住民は若者よりも観光のインパクトに影響され易く，また，観光産業に従事している人々は，より肯定的な態度を示し，観光地区に近接して住んでいる人々は，より頻繁に観光者と日常的接触をするので観光に対してより否定的な態度を示すことが明らかにされた。

これら一連の研究を通じて，観光者と地域住民との相互作用に関する理解が深まり，それは基本的な評価への何種類かの関数に従うことが明らかにされた。例えば，Moscovici[35]はコミュニティ内における観光産業の社会的表象の存在を指摘した。彼は，社会的表象を「行動とコミュニケーションの目的のためにコミュニティによって行われる社会的対象の労作」と定義し，社会的表象とは，特定の対象または問題に対する大衆の態度や意見以上のものであると論じた。すなわち，コミュニティをして，自分たちの社会的世界として理にかなったものにする行動のための価値，考え，指針などを含む理論あるいは知識体系であって，例えば，観光産業に関しては，「雇用の新しい供給源としての観光[36]」あるいは「文化の破壊者としての観光[37]」などがあげられる。

この新しいモデルは，観光インパクトに関する段階モデルを認めず，観光の公正な価値－社会的・表象的見解の結合を中核的存在とし，将来の観光開発への地域住民の反応は，観光効果の費用－便益様式の評価やコミュニティ内の各集団の社会的表象による分類を提唱した。この公正な社会的表象に関する研究は，将来の観光への理解を増進させ，より優れた地域住民とホストの管理の解決に資するものと思われる。

これに関して，Pearce は，つぎの５つの戦術を提案している[38]。

１．教育と観光

観光によるマイナスの観光者と地域住民のインパクトの多くは知覚

的インパクトであるために解釈の間違いと誤解が生じやすい。観光に関して比較的に詳しい教育を受けたコミュニティは開発の諸インパクトをよりよく分析し理解することができる。したがって，観光者の習慣や文化的差異について情報キャンペーンを行うことは，観光者と地域住民との関係の改善にとって必要である。

2．コミュニティの見方の組み入れ

コミュニティあるいはコミュニティの利益を代表する団体は，必ずしも観光の計画策定の専門家ではないが，少なくとも大まかな概念の段階では，代替案の選択行動などに，その見方を組み入れることは重要である。

観光開発におけるコミュニティへの社会的インパクトの予想・防止・管理に関するガイドラインとして，特につぎの各事項は，社会的インパクトの減少策として重視される。

(1) 全体的な開発の目標および優先事項は地域住民のそれと調和している。

(2) 現地のアトラクションの宣伝は地域住民の支持を条件とする。

(3) 先住民および（あるいは）先住民族は，社会的必要性を尊重するために開発のプロセスと密接に関わりあう。

(4) 観光に関するイベントと活動に対して幅広いコミュニティの参加がある。

(5) 観光地は，歴史，立地，地理的背景を反映したテーマとイベントを採用するか，あるいは磨きをかける。

3．地域住民に対する機会の増加の原則

コミュニティの観光に関する社会的環境やレジャー環境を高め観光開発がうまく受け止められるためには，地域住民のレクリエーション，

買物，安楽な暮らしなどに関する機会の制限や，開発計画策定における地域住民の必要性について考慮する。

4．コミュニティの公正管理委員会

管理委員会における実質的なコミュニティの代表による所有や，コミュニティを構成するグループによる所有を通じた観光施設のコントロールは，マイナスの社会的インパクトを制限する手法のひとつである。観光開発に現地の資本，現地の企業家の才能や労働力を最大にすることを試みたり，現地の資本と労働力が不十分な場合には，現地の社会監視委員会の有効な活用などが社会的表象が観光は外部者の手中にあるという印象を地域住民が持っているところでは講ずべき手段としてあげられる。

5．調査と監視

環境学，生物学の分野など学術調査を地方での観光が成長する前に徹底的に実施し，また，鍵となる社会的インパクトの指標や警告信号の調査と監視を行い，コミュニティの利益を尊重し予想される地域住民の不満の発火点に関するデータを示すことは，社会的インパクトの監視にとって効果的である。この場合，取り組む必要のある研究課題はつぎのとおりである。

① 異なったタイプの開発が行われている類似のコミュニティにおける観光者と地域住民の相互作用のデータベースを構築すること。

② 高圧的なコミュニティにおいては，観光者と地域住民との相互作用の今後の推移や，観光の社会的インパクトが持続する場合の開発の経済的な実行可能性と生起が予想される問題について時間をかけて観察すること。

マス・ツーリズムに対して，近年増えつつある非難として，交通，騒音，

混雑といった社会的公害があり，D'Amore[39]は，「地域住民が観光開発から，あらゆる側面を考慮しても容認できない程の社会的不利益を被っていると気付くところが社会的適正収容力の限界である」と定義している。

このため地域コミュニティの保全の観点から，例えば，小規模な地方レベルにおける観光の私企業化は，つぎのごとき状況においては有利であると思われる[40]。

(1) インフラストラクチャーが地域社会の要求を満たす以上に存在し，少なくとも地域コミュニティに混乱をもたらさない季節的，あるいは一時的なゲストとして，これまで以上の訪問者を吸収することができる。

(2) 政府が自国民と訪問者の双方にとって必要とされるべき保健政策や災害援助を含んだ補足的サービスを従来通りに提供できるか，または新たに設定できる。

(3) 訪問者が単調なきまりきった生活から新たな興味と休息をもたらすという理由から，地方の人々が訪問者を歓迎する。

(4) 訪問者の存在が手工芸品市場を刺激して，地元産品の販路拡大になることがある。

(5) 訪問者が民族的，国家的遺産の保存を助ける文化的なパフォーマンスについて目の高い鑑賞者となる。

(6) ホストとゲストの双方が共通の言葉を通じて意味深い談話を行う。

(7) ホストとゲストが同じ宗教的信条や宗派の信者であるとか，農民同士とか，同じ職業であるとか，あるいは共通の友達や親族がいるなど互いのアイデンティティの基礎を共有する。

(8) 訪問者と被訪問者が地元で重要と思われている事業，例えば，必要とされているコミュニティ・センターの建設などで，共有する経験は

お互いを親密にし，結束を持続させる。

(9) 年齢別グループが何等かの形で類似しており，仲間グループの興味を反映している。

(10) ゲストの品行，服装，ライフスタイルなどが，地元の社会的慣習にとって快いものである。

小規模な地方観光施設の私企業化は，(1)既存の社会的ネットワークを通じた地域住民による地方の観光の管理・運営への参加，あるいは意思決定者としての特別の組織の設立，(2)コミュニティにおける個人の地位の確立や，より広いコミュニティにおいて発言力を持っている奉仕団体への加入など，広範なネットワークへのアクセスが可能，(3)独立した企業家としての心理的満足感と，経営活動を通じ所得の増大を図る機会の創出，(4)私企業化の成功による家族の財産，あるいは退職時に得られる売却可能な資産としての事業の持分の構築，(5)家族経営による高齢者，障害者，若年者など，他では職を得ることが難しい家族構成員に対する職の付与など，その促進を肯定する動機づけがあげられる。しかしながら他方において，(1)地方における事業所有の機会は，必ずしも平等に得られるとは限られず，学歴，家柄，観光地への地理的近接性，人格などが関係する，(2)事業運営の成功は，個人の能力や適切な訓練，市場などに比例する，(3)発展途上国においては，通常，既存の階級組織に結びついた伝統的あるいは家族的なネットワークに根付いており，観光収入に基盤をおく新たなビジネス・リーダーの出現は秩序を乱し，社会的にもめごとを起こしやすい，(4)同じコミュニティの中で，既に資本，あるいは良質の職をもっている者と恵まれない者との格差が広がるといった欠点と思われる事項があげられる。

観光者と地域住民とのインパクトの問題は，学問的にも，また，観光産業の発展にとって重要な意味をもっており，特に観光発展の成熟段階より

も開発段階および再開発段階におけるコミュニティの関心によって大きく影響される。

(注)

11) 以下の叙述は主として下記の論文を参照した。
Brian Archer and Chris Cooper (1994) The positive and negative impacts of tourism, in William Theobald (ed.), Global Tourism-The next decade-, pp.73-91.
ブライアン・アーチャー／クリス・クーパー稿，玉村和彦監訳，観光のプラスとマイナスのインパクト，ウィリアムF・シーアボルド編著，観光の地球規模化一次世代への課題，晃洋書房，1995年，61－81頁。
Philip L. Pearce (1994) Tourism-resident impacts: examples, explanations and emerging solutions, in William Theobald, ibid., pp.103-123.
フィリップL・ピアス稿，玉村和彦監訳，観光客と住民のインパクト：例，解説，明らかになる解決策，ウィリアムF・シーアボルド編著，前掲書，82－104頁。
12) Urry, J. (1990) The Tourist Gaze, Sage, London.
13) Philip L. Pearce, ibid., pp.106-110.
14) Smith, V.L. (ed.) (1978) Eskimo tourism: micro models and marginal men. In Hosts and Guests (ed. V.L. Smith), Blackwell, Oxford.
15) Urbanowicz, C. (1978) Tourism in Tonga: Troubled Times, In Hosts and Guests (V.L. Smith, ed.), Blackwell, Oxford.
16) Petit-Skinner, S. (1977) Tourism and acculturation in Tahiti. In The Social and Economic Impact of Tourism on Pacific Communities (B. Farrell, ed.), Centre for South Pacific Studies, University of California, Santa Cruz.
17) Kent, N. (1977) A new kind of sugar. In A New Kind of Sugar: Tourism in the Pacific (eds. B.R. Finney and K.A. Watson), The East-West Center, Honolulu.
18) Hills, T.L. and Lundgren, J. (1977) The Impact of Tourism in the Caribbean-a Methodological Study, Department of Geography, Mc Gill University, Montreal.
19) Community Resources Inc. (1989) 'Daily life and attitudes towards visitors', Hawaiian Statewide Tourism Impact Core Survey.
20) Ross, G. (1990) Do we really dislike the Japanese? Resident reactions to various cultural groups of tourists. Mina, 1 (6), pp.16-19.

21) Pi-Sunyer, O. (1978) Through native eyes: tourists and tourism in a Catalan maritime community. In Hosts and Guests (V.L. Smith, ed.), Blackwell, Oxford.
22) Furnham, A. and Bochner, S. (1986) Culture Shock, Methuen, London.
23) Allen, L.R., Long, P.T., Perdue, R.R. and Kieselbach, S. (1988) The impact of tourism development on residents' perceptions of community life. Journal of Travel Research, XXVII (1), pp.16-21.
24) Dredge, D. and Moore, S. (1992) A methodology for the integration of tourism in town planning. Journal of Tourism Studies, 3 (1), pp.8-21.
25) Smith, H.P. (1955) Do intercultural experiences affect attitudes? Journal of Abnormal and Social Psychology, 51, pp.469-77.
26) Doxey, G.V. (1975) A causation theory of visitor-resident irritants: methodology and research inferences. In Proceedings of the Travel Research Association Sixth Annual Conference, San Diego, California, pp.195-8.
27) Butler, R. (1980) The concept of a tourism area cycle of evolution: implications for management of resources. Canadian Geographer, 24, pp. 5-12.
28) Brougham, J.F. and Butler, R.W. (1981) A segmentation analysis of resident attitudes to the social impact of tourism. Annals of Tourism Research, 8, pp. 569-90.
29) Liu, J.C. and Var, T. (1986) Resident attitudes to tourism in Hawaii. Annals of Tourism Research, 13, pp. 193-214.
30) Liu, J.C., Sheldon, P. and Var, T. (1987) Resident perception of the environmental impacts of tourism. Annals of Tourism Research, 14, pp. 17-37.
31) Long, P.T., Perdue, R.R. and Allen, L. (1990) Rural resident tourism perceptions and attitudes by community level of tourism. Journal of Travel Research, 28, pp. 3-9.
32) Milan, A. and Pizam, A. (1988) Social impacts of tourism on Central Florida. Annals of Tourism Research, 15, pp.191-204.
33) Murphy, P.E. (1981) Community attitudes to tourism: A comparative analysis. International Journal of Tourism Management, 2, pp.189-95.
34) Sheldon, P. and Var, T. (1984) Resident Attitudes to Tourism in North Wales Tourism Management, 5, pp.40-8.
35) Moscovici, S. (1963) Attitudes and opinions. Annual Review of Psychology, 14, p.251.
36) Brougham, J.F. and Butler, R.W., ibid.
37) Greenwood, D.J. (1978) Culture by the pound: an anthropological perspective on tourism as cultural commoditization. In Hosts and Guests (ed. V.L. Smith),

Blackwell, Oxford.

38) Philip L. Pearce, ibid., pp.119-120.

39) D' Amore, L. (1983) Guide•lines in planning harmony with the host community. In Tourism in Canada: Selected Issues and Options (ed. P. Murphy), University of Victoria Western Geographical Series 21, Victoria, BC, pp.135-59.

40) 以下の叙述は主として下記の論文を参照した。

Valene L. Smith (1994) Privatization in the Third World: small-scale tourism enterprises, in William Theobald (ed.), ibid., pp.163-72.

ヴァレンL・スミス稿，玉村和彦監訳，第三世界における私企業化：小規模観光企業，ウィリアムF・シーアボルド編著，前掲書，107－21頁。

Ⅳ　イベント観光とオーセンティシティ

オーセンティシティとは，眞の，混ぜもののない，あるいは本物を意味し，観光では，観光地における文化の商業化によって，本物の文化に基づく伝統の商品化による本物の文化に基因した経験をする機会の減少などに関係している[41]。持続可能な文化的観光の観点からイベント観光は観光収入の増大とともに，観光者にとって，日常の経験を越えたレジャーや社会的・文化的経験の機会をもたらし，ホストとゲストの結びつきを強めるなどの効果が期待される。

Vallee[42]は，「オーセンティシティとは旅行者によって望まれ，積極的に求められる経験であって，観光地における日常生活の眞実で純粋な本質を反映するか，またはこれにつながる手段を与えると認められる」と述べているが，文化的オーセンティシティを維持するためには，適切な組織構造をともなったコミュニティからの支援は，受容可能な意思決定の過程や商業主義的考慮よりも優先され，文化の高潔さへの関わりの観点からも不可欠の要素である。

魅力的で文化的価値の高い観光商品化が成功するためには，テーマの創

造，適性，伝統化，コミュニティのコントロールと受容，文化的意味の明確化，観光者の満足などに関連した商業的イベントのオーセンティック化とよりよい観光商品・市場適合化が図られる必要がある。

近年，歴史的テーマを持ったイベント，あるいはコミュニティや文化グループの文化遺産を祝うイベントが注目されている。文化遺産に関連したイベントは，国家やコミュニティの伝統や価値観，土地固有の感覚を反映したテーマを持った祭り，その土地におけるその他特別のイベントなど多様な形態をもっており，また，コミュニティを理解させる手段とも見做され，歴史的事物や再現された出来事，あるいは生活様式に直接触れることを通じて，コミュニティの歴史的伝統や文化に対する知識や理解が向上する。このためには，コミュニティにおける文化遺産の意味についての理解の促進，土地固有の感覚の創出と強調，環境や文化遺産に対する理解と価値観の確立などアイデンティティの確立を刺激し，関心を高めさせ，観光者にとってもオーセンティシティックな感覚的相互作用をもたらす必要がある。

したがって，文化遺産関連のイベントの計画に当たっては，つぎの事項が重要になるであろう[43]。

(1) コミュニティが存在している土地の価値観，伝統，感覚などを反映し，そのイベントの意義を明らかにする。

(2) 人と環境，社会と文化などの相互関係を明らかにする。

(3) それらは重要な遺産としての対象物，史跡，土地との接触を提供したり，歴史上の出来事や生活様式を再現する。

(4) それらは「活気のある」あるいは眞に「特別のイベント」でなければならない。そのためには，単に知的好奇心だけでなく，感情も刺激するプログラムと雰囲気を必要とする。

(5) それらは訪問者が生き生きとしたコミュニティに参加することを認める。

(6) それらはコミュニティの価値観を反映したオーセンティックである。

しかしオーセンティシティのイベントへの適用には限界があり，観光者の行動様式や価値観とコミュニティのアイデンティティとの共存に関する理解と経済的触媒としての機能評価が不可欠である。文化遺産関連のイベ

表2　文化遺産のイベントの種類とコミュニティの理解に果たす役割

イベントの種類	例	役　　割
オーセンティックな史跡の再現	戦闘 祝日の儀式 季節的行事(例，収穫)のデモンストレーション	「生きた歴史」の不可欠な部分 史跡のテーマや史跡との関連においてオーセンティックであること コミュニティの過去の展示
史跡とは無関係なイベント(イベントの背景としての史跡)	アンティーク・ショー テーマのあるパーティ 展示会，民族的および多文化的フェスティバル	史跡とコミュニティとの関連を促進する 史跡を生きた，変容するコミュニティの一部であると認識すること
文化遺産の機関による史跡以外の場所で行われるイベント	「生きた歴史」への旅行 要望によってつくり出されたイベント	コミュニティにイベントに関する特別の理解をさせること 史跡や機関との関連性を明らかにすること
コミュニティの祭と儀式	コミュニティ規模の文化遺産関連あるいは非文化遺産関連のイベントの要素	文化遺産の機関あるいは史跡の間で育成されるつながり イベントのプログラムに適用される理解を促進する技術 コミュニティ全体が理解の促進に関わること 生き生きとしたコミュニティの強調

(出所) Donald Getz, ibid., p. 323.

ントの種類とコミュニティの理解に果たす役割について，Getz は表 2 のごとく分類しているが，これらはそれぞれ特有の内容と課題を提供している。特にアメリカのバージニア州コロニアル・ウィリアムズバーグは，教育的で楽しい生きた歴史を感じられる史跡として知られている。

さらに，文化遺産関連のイベント計画の枠組みは，計画の支援，内容の決定，ホスト・コミュニティの理解を目ざして，Getz は表 3 のごとく目標，

表 3　オーセンティックな文化遺産のプランニング，プログラミング，評価のためのフレームワーク

目標	文化遺産の管理者と理解を促進する者の役割
コミュニティの理解促進：教育	イベントのプランニング
史跡と資源の管理	イベントのマーケティング
経済開発：観光	基金の設立（例：助成金，スポンサー，販売，イベント）
コミュニティ開発	プログラムと生産
史跡のマーケティング	不可欠なサービス（アクセス，通信，安全，保健，情報，特別な訪問者向けサービス，飲食）
収入の創出	スタイル要素（大がかりな見せ物，参加型，娯楽，儀式と祝典）
史跡とコミュニティとの連携の促進	背景のデザインと管理
史跡と機関との連携の促進	テーマの明示（名称，ロゴ，マスコット，活動，アトラクション，飲食物，土産品などを通じて）
文化遺産資源の評価	学習様式と理解のメカニズム
コミュニティの歴史	
文化遺産となる史跡と対象	評価
候補となるテーマ	史跡における評価と問題解決
イベントのテーマと種類の決定	目標達成
歴史の再演	資源の効率的利用
記念行事	コンフリクトの解決
民族的あるいは多文化的な行事・習俗	適切な目標とプログラムの再声明
芸術や娯楽（現代）	
レクリエーションあるいは競争的スポーツ・遊び	
ショーや展示会：販売	
パレード	
組織	
運営体の種類（新規および既存）	

（出所）Donald Getz, ibid., p. 326.

文化遺産資源の評価，イベントのテーマと種類の決定，組織，プログラムと生産，評価の各項目の枠組みについて説明している。

伝統的な祭りやイベントは，特に商業化の影響を受けやすいが，他方，文化の保護や再生は観光の動機ずけからそのオーセンティシティに基づくコミュニティの理解と支援が重要である。すなわち，オーセンティシティの本質がその文化的意味にあるならば，それはホスト・コミュニティにとっても意味があるものと認められるものでなければならない。

祭りやイベントのオーセンティシティは，つぎのごとき状況で最大になると思われる。

(1) 固有のテーマを反映している。すなわち，その土地の価値観や伝統，感覚の意味を明らかにする。

(2) 人と人，人と環境との相互関係を明らかにする。

(3) ホスト・コミュニティによってコントロールされている。すなわち，外部の破壊的な影響から保護され，適切な機関と意思決定過程が存在する。

(4) 居住者によって評価され，積極的な参加を得ている。

(5) 感情や知的好奇心に対して興味を与える。

(6) 郷土料理や民族衣装，民族舞踊，民芸品など純粋に文化的なものを提供し，その生活様式などに直接触れることができる。

(7) 品質を犠牲にした利益の最大化によって観光者を搾取しない。すなわち，商業的目標が文化的目標と一致している。

(8) ホストとゲストの交流によって生き生きとしたコミュニティへの参加が認められる。

(9) 歴史的な出来事や対象を正確に描き出す。

観光の観点からは，眞の課題は，ホスト・コミュニティにおいて好まし

いイベントとオーセンティックな文化的パフォーマンスに基づく観光商品の魅力化と訪問者の満足の向上を指向して，眞のイベント観光はコミュニティ自らの意思決定を行う権利の尊重と人材育成ならびにリーダーシップの発揮などが重要になるであろう。

（注）

41）以下の叙述は主として下記の論文を参照した。
Donald Getz (1994) Event tourism and the authenticity dilenma, in William F. Theobald (ed.), ibid., pp.313-29.
ドナルド・ゲッツ稿，玉村和彦監訳，イベント観光とオーセンティシティ（本物）のジレンマ，ウィリアムF・シーアボルド編著，前掲書，192－213頁。

42）Vallee, P. (1987) Authenticity as a Factor in Segmenting the Canadian Travel Market; Master's thesis, Department of Recreation and Leisure Studies, University of Waterloo, p.27.

43）Donald Getz, ibid., p.322.

V　結び

観光は経済的な費用と便益に加え，受入れ国（地域）に対して政治的・文化的・社会的・道徳的・環境的変化をもたらす。国際観光に関しては，平和と国家間の理解に資する反面，先進国と発展途上国の間で行われる長距離旅行の増加は，互いに広く異なった背景をもった人々や，非常に対照的なライフスタイルや所得水準の人間相互の直接的な接触によって，その差が大きい場合には，その社会文化的影響とともに，深刻な政治的影響をもたらすケースも認められる。

国家間あるいは地域間の幅広い文化的差異の存在は，一面において観光

産業の主要な動機のひとつではあるが，その文化的な行動の差異が相互理解よりも反感に取って代られる場合もあり，この場合，観光地の社会的適正収容力に関する調査研究，すなわち，コミュニティに基礎を置いた観光計画立案のモデル研究や，社会学者と経済学者の共同研究による観光の社会経済的な費用と便益の定量化が課題となるであろう。さらに，観光の環境的・生態学的な効果に関しては，その損失の程度と性質は，開発の規模と来訪者数，利用の空間的･生態学的な集中状態，問題となる環境の性質，開発前後に採用された計画立案と管理方法の質などに関係しており，ホスト・コミュニティの目的と目標に留意した観光地における観光の環境的・社会的・文化的状況の計画への組み入れや管理手法の採用は，観光と環境との関係における重要な問題である。

1980年代半ば頃からの環境保護と緑の意識の高まりに加えて，観光の役割や価値に対する再検討への関心の増大は，長期的な計画への展望とともに，観光の新しい形態として持続可能な観光開発に基づく産業への支持の再評価をもたらした。観光事業にとって，コミュニティへの有害な影響を防止し，その改善に資するために考慮されるべき鍵としては，(1)地域住民が望む観光者の数とタイプ，(2)地域の物理的・環境的・社会的な適正収容力，(3)観光者による地域住民の生活様式の発展への寄与があげられ，地域住民と観光者が同等に長期的な便益を享受できるような持続可能な観光あるいは責任ある観光に裏付けられた新しい観光志向としての「地域住民対応型観光」が，今後，観光論の研究にとって益々重要になってくるであろう。

(1998.5.10)